

2021年度藤田哲也博士記念シンポジウム開催案内

Fスケール考案から50年

～日本と米国の竜巻、そして北九州新科学館紹介～

講演ー1、2、3のレジメ

藤田哲也博士の功績の一つは1971年に竜巻の強さの階位「F(藤田)スケール」を考案したことです。今年はFスケール提唱から50年目に当たりますので、日本の竜巻被害調査や米国の竜巻、また北九州市で来春開館予定の新科学館(愛称「スペースLABO」)内に準備中の藤田博士に関する展示や大型竜巻発生装置の紹介をします。

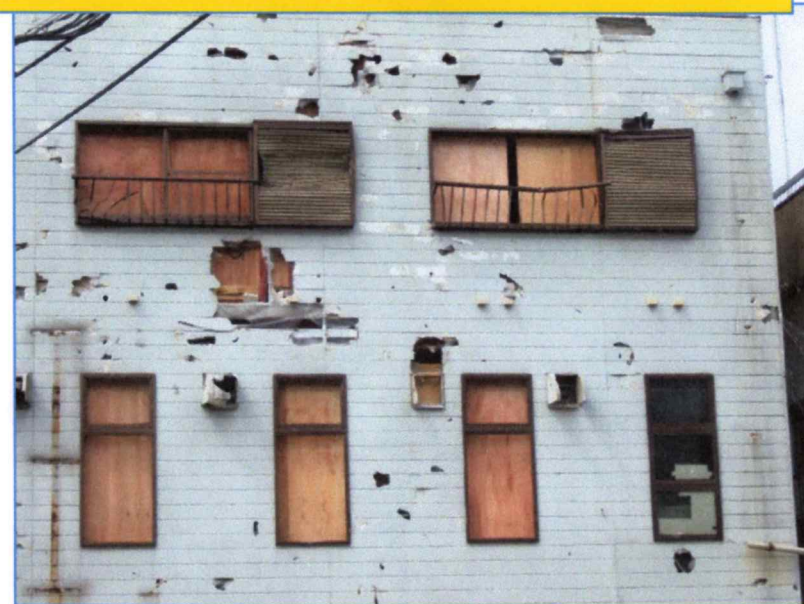
なお、藤田博士の自伝「ある気象学者の一生」には次の様に書いています。

「アメリカには毎年千個以上の竜巻が発生し、圧倒的なたつまき発生国である。アメリカでは竜巻の発生数を数えるだけで、強さを全く無視していた。それに気付いて、1971年にFスケールを作り、数年間テストした。今では、アメリカ、日本、カナダ等の各国で使われ被害の判定にも利用されている。」

「竜巻の現地調査(2006年延岡市F2竜巻)と日本版改良藤田スケール」

概要:日本では、竜巻による突風被害が年間約23件(海上竜巻を除く)発生しています。突風被害が発生すると、各地の気象台は職員を現地へ派遣して被害状況を調査し、突風をもたらした現象の種類やFスケール(突風の強さ)を評定し、結果を公表しています。2006年に延岡市で発生したF2竜巻の被害調査を例に、どのように現地調査を行っているか、また、日本の建築物等の被害に対応するよう改良した「日本版改良藤田スケール(JEF)」について、概要を紹介します。

講師:瀧下洋一様(たきしたよういち)
鹿児島地方気象台台長



2006年延岡市で発生した
竜巻被害の特徴的な写真

略歴:1986(昭和61)年 新潟地方気象台採用、
2006(平成18)年 予報部予報課調査官(延岡竜巻被害調査、竜巻注意情報開発)、
2014(平成26)年 観測部情報管理室課長補佐(日本版改良藤田スケール)、
2019(平成31)年 熊本地方気象台長、
2021(令和3)年 現職

■講演-2: 「Fスケール考案のいきさつと、アメリカ竜巻辞典」

13:55～14:35

概要: ひょこっと現れて被害をもたらし、さっさと居なくなってしまうのが竜巻である。そんな逃げ足の速い竜巻をどのように分類するのかという問題は、竜巻大国アメリカ出身の研究者ですら解決しえなかった。その難題に取り組み、世界で初めて「竜巻スケール」を完成させたのが、北九州出身の藤田哲也博士である。これまでアメリカで起きた実際の竜巻の例を紹介しながら、藤田博士が残した偉業について話をしたい。



アメリカ最強と言われている1999年
オクラホマ竜巻の跡地の写真
(出典: アメリカ海洋大気庁)

講師: 森さやか様(もりさやか)

気象予報士、NHK-World-Japan気象アンカー



略歴: 国際放送NHK World気象アンカーとして、英語で世界の気象を伝える気象予報士。アルゼンチン生まれ。著書に「竜巻のふしぎ」と「天気のおくみ」(共に共立出版。森田正光と共著)がある。Yahoo! Japan個人や、月刊誌「世界」(岩波出版)にて連載をしている。

■講演 - 3: 「新科学館における藤田博士の顕彰展示について」

14:40~15:10

概要: 2022(令和4)年春に、北九州市八幡東区東田地区のスペースワールド跡地(イオンモール新施設の敷地内)に移転オープンする北九州市の新しい科学館について、藤田哲也博士の顕彰コーナーを中心に、国内最大の大型竜巻発生装置や最新鋭のプラネタリウムなど、館の見どころを一足先にご紹介します。

講師: 遠藤大介様(えんどうだいすけ)
北九州市新科学館担当課長



北九州新科学館の大型竜巻発生装置
のイメージパース(北九州市提供)

略歴: 1994(平成6)年、北九州市役所に入職。
主に産業振興部門を経て、2019(令和元)
年度より現職。